

「もし国を創るなら」

～富国強兵か、小国寡民か～

目次

1. はじめに (議論の目的)
2. 時代背景
3. 議論の方向性
4. 「富国強兵」・「小国寡民」とは
5. 論点
 - ・ 論点① 「君主」
 - ・ 論点② 「法制度」
 - ・ 論点③ 「国防」
6. 参考文献

1. はじめに (議論の目的)

「価値観を問うSPDにしたい」それが、SPDを企画した理由である。私は弁論を作るとき、自身の価値観や理念を形容し、理解してもらうことがもっとも困難であると感じていた。それは価値観というものが常日頃から話して、理解してもらう類のものではなく、それゆえに、それを表現する言葉を磨く機会が少ないからではないだろうか。よって本SPDでは、価値観を表現する言葉を見つけることを目的とし、必ずしも論破・説得を目的としない。このSPDを経て、自分の価値観を再発見し、その価値観を形容するに最適な言葉を見つけていただけの一助となれば、幸いである。

また、今回はテーマとして価値観の対立であった、古代中国「百家争鳴」の時代に起きた論争が最適と考えた。その上で、ロールプレイング方式を用いて、政治思想の方向から価値観へアプローチしていきたいと考えている。

2. 時代背景

春秋戦国時代（前770年～前221年）という時代は、中原の地が初めて体験する大規模な乱世であった。周王朝の衰退と同時に、「春秋五覇」や「戦国七雄」が十数年のスパンで栄枯盛衰を繰り返していた。

この時代が特異なのは、この乱世が単に大国同士のパワーゲームではなかったことである。君主は、覇を争うために優秀な人材を求め、見識があるという人物であれば、君主が直接話を聞き、気に入れば即座に重役につかせた。これはつまり庶民は、自身の論で君主を説得さえできれば、国家の大権を一手に任せてもらえることを意味する。いわば舌さえあれば、国をプロデュースできたのである。その結果、弁だけを頼みに諸国で君主に謁見し、雄弁をふるった「弁士」と呼ばれる人々が現れた。弁士たちが築き上げた思想体系こそが諸子百家である。諸国ではそれぞれ異なった思想体系のもと政策が打たれるようになった。そして、その成否を問う場所こそ、戦争であったのである。つまり、春秋戦国時代の覇権争いとは単なる権力闘争ではなく、**思想体系同士の争いでもあったわけである。**

3. 議論の方向性

今回は議題として、諸子百家の中から、富国強兵を理想とした法家と、小国寡民※1を理想とした道家の思想から対立軸を拾い上げ、議論を行う。

議論は、あなたは春秋戦国時代の弁士であり、君主を説得することさえできれば、あなたの思うとおりの国を創ることができる、という仮定に基づき行いたいと思う。

その上で、あなたの立場を決め、以下に示す対立軸に関し、「本当に示された方法で理想とする社会にたどり着けるのか」という観点から議論したうえで、「なぜその理想が正しいと言えるのか」という観点から論証を行ってほしいと思う。

また、議論の途中で多少論理に無理を感じたり、実現できないとなっても、なるべく初志を曲げずに議論して行ってほしいと思う。（議論後、意見変化の決をとらなくともよい）

4. 「富国強兵」・「小国寡民」とは

「富国強兵」

国家の経済力と軍事力強化を最優先に行うべきであるとする法家の政治思想である。

法家では、人間を性悪であるとし、人を治めるには法術と力をもってして行う以外に方法はないとしていた。それをおこなう前提として君主は強く、法は厳しくあらねばならないと考えていた。そのため何人に対しても信賞必罰を説いた。

「小国寡民」

国家の国土は小さく、人口も少なくあるべきであるとする政治思想。「老子」を筆頭とする道家思想の理想社会である。

道家では価値や力は絶対的ではありえなく、相対的かつ必衰であるとしていた。力を持つ者・栄える者ほど早く滅びると述べ、むしろあえて弱く、小さくあるほうが生き延びられると考えていた。そのため、個人においては「柔弱謙下※2」を解き、国家においては「小国寡民」を説いたのである。

5. 論点

論点① 「君主」

法家

君主は国家の最高権力者であり、君主が国家である。また、その地位を狙うものは数多いため、君主は側近であれ全面的に信頼してはならない。「術」を用いて臣下の忠誠を常に試すべきである。（人を信ずれば、人に制せらる）

人の口にとは立てられず、謀略は誰かに話すととたんに衆知のものとなる。君主は決断の際、一切を一人で行い、誰にも口外するべきではない。

例：趙高の用いた「術」（『馬鹿』の話）

道家

君主とは虚ろであるべきである。臣下を信じて任せ、それを許容するのが君主である。君主は臣下を入れる器のようなもので、もっとも理想的な君主の下では、人民はそもそも君主が存在することすら忘れていた。それがもっとも自然な政治が行われている証拠なのである。

例：「そうせい候」劉邦

※1 国土が小さく、人口が少ないこと

※2 力の必衰なることを知った上で、あえて弱きに身を置くこと